

『論語』

加地伸行訳注／講談社

私の手元には、いつも一冊の本がある。いわゆる座右の書というやつだ。学生の指導や研究で悩んだ時には、べらべらと読む。すると心が自然と落ち着く。それは誰でも知っている『論語』だ。

何度かこのブックガイドに取り上げようと思ったが、学生さんが興味を持つとは思えなかったので取り上げるのをためらっていた。すぐ役に立ち、楽しめる本ではない。しかし、君たちの人生において大きな力となることは間違いない。君たちは今後、激しい競争に直面することだろう。他人から理不尽な言動や扱いを受けるかもしれない。何もかもうまくいかず、失意のどん底を味わうかもしれない。本書は、そんな時の行動指針や生きる糧になるだろう。このブックガイドを読むような学生さんのなかには、既に読んでいる人が多いかもしれないが、手元に常に置いて欲しい一冊だ。

昨今の日本経済は非常に厳しい。上向く気配が感じられない。効率化のために、競争原理がどの分野にもすごい勢いで導入されている。大学もしかり。生き残りのために必死だ。しかし、競争原理の導入により、「自分の行動を損か得かで判断する人が増えている」ように感じ、私は非常に懸念している。

学生の間では、「あの講義は単位が取りづらいから取らない」「その講義を取ると成績に響き、奨学金免除に不利だから取らない」などの話しが聞こえてくる。そこには、自分が何をしたいか、どう生きたいかが感じられない。企業社会では、「損失隠しや、その告発者の解任」「会社資金の私的流用」など、会社のトップとして当然備えていなければならない道徳観や倫理観が欠如した事件が後を絶たない。研究の世界でも、名声を得ようと先を争って著名な雑誌に論文を掲載しようと、「論文の捏造」が後を絶たない。

著名な実業家で『論語』を愛読する人は多い。明治の事業家「渋沢 栄一」、ワタミ社長「渡邊 美樹」、京セラ・KDDIの創業者で現在日本航空（JAL）の再建を手がけている「稲森 和夫」などである。稲森さんの著書の一つに『心を高める、経営を伸ばす』（PHP文庫）がある。本書には、『論語』に影響を受けた、彼の経営哲学を表す言葉がある。「動機善なりや、私心なかりしか」である。「動機が善であり、実行過程が善であれば、結果を問う必要がない、必ず成功する」。しかし、「結果

を出すために人の道を外れた行為をすれば、それはいつしか自分に返ってくる」ということである。

最後に『論語』の言葉をいくつか挙げておきます。興味があれば、本書でその意味を調べてみてください。

「子曰く、君子は偽に喩り、小人は利に喩る」

「子曰く、巧言令色、鮮なし仁」

「子曰く、人にして不仁ならば、礼を如何せん。人にして不仁ならば、樂を如何せん」

「子曰く、君子は周して比せず。小人は比して周せず」

「子曰く、位無きを患えず。立つ所以を患う。己を知る莫きを患えず。知る可きを為さんことを求む」

執筆者紹介

高橋 祥司

環境・建設系准教授。専門領域は、分子生物学、応用生物化学。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『論語 増補版』 加地伸行全訳注 講談社（講談社学術文庫） 2009年 1,313円

[ブックガイド目次へ](#)